赤武エンジニアリング株式会社 社内報

Akatake Times

BIMONTHLY
January | 2026
Vol. 70
（通算　第223号）

昨年末、我が社もスポンサーとして契約している、アスルクラロ沼津の
元監督である中山雅史氏(通称ゴン中山)が退任挨拶で来社しました。
日本サッカー界のレジェンドが来社するということで、我が社の社員も大騒ぎ。
サインや写真をお願いするための長蛇の列が会議室にできていました。

from Directors

Message

～ 新年を迎えて ～

◆「新年のご挨拶」

明けましておめでとうございます。
ご家族と共に、健やかな新年を迎えられたこととお慶び申し上げます。
旧年中は、それぞれの現場で多大なる貢献をいただいたことに、改めて深く感謝いたします。

◆「革新の先にあるもの」

さて、本年我が社は大きな転換期を迎えます。組織の形と業務のやり方を新しく整え、
次なる成長への一歩を踏み出します。
これを前に、少なからず不安を感じている方もいらっしゃることでしょう。
この変革は、我が社の事業そのものや、方針を変えるものではありません。
むしろ、その方向により、確実にまっすぐに進む為のものです。
すなわち、顧客に粉体ハンドリング技術で貢献する、社員の豊かな生活を実現することです。
この目標に向け、今まで皆さんや先達が成し遂げてきたことを、より組織的に、
よりスムーズに、働きがいを高め、日々の仕事をこなすだけでなく、将来の成長への
歩みも確実に行いながらできるようにするためのものです。
組織という器の形が変わっても、そこで働く『人』の価値と、私たちが培ってきた
『粉体ハンドリングとものづくりへの誇り』は、何ら変わることはありません。
今回の変革で、皆さんが培ってきたその高い技術や情熱を、より自由に、
より力強く発揮してもらいたいと思っています。
慣れた仕組みを離れるとき、人は戸惑いを感じるものですが、その先には、
今よりも風通しが良く、新しい挑戦を後押しできる環境が待っていると確信しています。

製造業の要は、最新の設備でも、ソフトウェアやAIでも、効率的な組織図でもなく、
それらを動かす「人の意志」にあります。どれほど時代が移り変わっても、
現場の創意工夫、細部に宿るこだわり、そして仲間を思いやるチームワークこそが、
強みの源泉です。

◆「2026年の挑戦」

新しい体制へと歩みを進める中で、迷うことや壁にぶつかることがあれば、
部門長のみならず、ぜひ隣の仲間に声をかけてください。
対話を通じて知恵を出し合い、共に解決していく。
その積み重ねが、新しい組織に「魂」を吹き込みます。
変化を恐れず、しなやかに。そして、自分たちの仕事に誇りを持って。
この変革を乗り越えたとき、私たちは今以上に社会から必要とされ、
社員一人ひとりがさらに強く、輝く企業へと進化できるはずです。
私は社長として、皆さんが安心して力を発揮できるよう、全力でサポートしていくことを
改めてお約束します。

◆「最後に」

2026年が、皆さんにとって挑戦しがいのある、実り豊かな一年となることを心より
願っております。
本年もどうぞよろしくお願いいたします。

代表取締役社長　赤堀　芳太郎

irodori

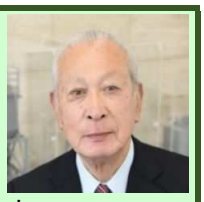
受付に華やかさを添える生け花。
今回は、2025年10月～11月に
生けた花の中から選りすぐりの
1点を選んでいただきました。

- ケイトウ
- クジャクソウ
- ミヤマリンドウ

from Directors

Message

～ 謹賀新年 ～



◆「丙午」

もののNet情報によると2026年は60年に一度しか巡ってこない丙午（ひのえうま）だそうです。
丙干の『丙』と十二支の『午』が組み合わさった六十干支の43番目で両方が火の性質を持つため
調和した強い火が生まれ、太陽のように燃える盛る情熱と勢いが倍増。大きな飛躍のチャンス
ですので新しいことや諦めかけていたことに挑戦すると良い結果につながる年になるでしょう。
ただし、感情的にならず長期的な視点で物事を判断することが大事とあります。
背中を押されている感がします。
我が社の経営スローガン『意識を変え　やり方を変え　業績を変えよう』を強く推し進めて
いかねばなりません。折に触れて話しています「売上（受注）無くして事業無し」、
「企業の目的は顧客の創造。そして社会貢献」、「悲観的に準備し楽観的に対処」、
「利他の心」、「茹でガエル」・・・公私とも油断をしないで過ごしてください。

◆「戦友」

昨年10月に20年ぶりで大学時代の同級生5人と長野で再会。
大阪、京都、長野、埼玉、沼津にそれぞれ住み、あっちこっち故障があるものの
何とか元気でいるのがお互いありがたいことです。一泊の旅のなかで近況報告はもとより、
甘酸っぱくも泣き笑いの学生時代の思い出話に花が咲き、青春時代に還ったようで
楽しい時間を過ごしました。
社会に出てからは、お互いに団塊の世代（昭和22年～24年の出生数806万人）ですので
競争相手であり、またそれゆえ良き“戦友”でもあります。
そんな感慨も相まってことさら再会が嬉しいのではないかと思っています。
来年また元気で会おうと約束して互いの巣に帰った次第。

◆「叔父の出版について」

私には二人の高齢の叔父がいます。お二人ともいたってお元気です。
一人は豊明に住む現在94歳の叔父。1931年生れ、小笠郡小笠町（現菊川市）出身。
私の実母の弟にあたります。その叔父が昨年10月に本を文芸社から出版しました。
タイトルは「中條右近太夫」。4年間かけて調査研究をおこない発行にこぎつけたとのことです。
徳川家康が掛川訪問時に味覚したまずい水を憂い、承認した水無田村の用水路工事。
村人の手弁当で6年かけ完成も台風で崩壊。藩の理不尽に挑んだ農民・右近は、
妻・花代の烈怒や息子・理平太の静かな覚悟と村人の絆を支えに、郷村掟を破り、命を賭して
将軍直訴を決行。封建制度の不条理と利他精神を、史実に基づいて描く感動巨編。
今なお胸に迫るリアルな人間ドラマ。388ページの大作です。
私はここ数年、400字詰め原稿用紙3枚を書き上げるのに大変な時間を費やします。
集中する機能が随分と損なわれているようです。
その意味、叔父は化け物のような気がします（失礼）。
もうお一人は1927年生まれ、沼津市出身。義父の弟にあたり現在98歳の赤堀　尚（なおし）画伯です。
尚画伯の作品を永きにわたり当社のカレンダーに使用させていただきました。
日本橋高島屋、日本橋三越、和光などにて数多く個展を開催され、今なお創造力旺盛で
今年2026年に日本橋高島屋にて個展を計画しているとのこと。
老いてなお精力的に表現活動を行っている姿に敬服です。
お二人は正に人生100年時代のお手本です。今後も健康に留意され長生きしてほしいと願っています。

◆「生成AIの使い方」

AI技術は日々驚異的に進化しています。我が社もAI技術を取り入れ生産性を高めていかねば
なりません。同時に以下のような情報も重要かと思われます。
井上 隆史氏（元日立製作所生産技術研究所）の講演演題と副題を参考に記載します。
『巻き込まれる側のAI学～生成AIその実体と負の側面～』 2022年11月にChatGPTが
公開されて以来、生成AIは急速に社会へ浸透し、情報基盤の一角とまで喧伝されている。
メディアは利点ばかりを強調するが、誤情報や著作権問題など深刻な害も伴う。作文能力を
武器に翻訳や要約、プログラム作成など応用は広がる一方、正確性の保証はなく虚偽も提示される。
私たち市民はその実体を理解し、生活に浸透する新たな脅威への対処を考える必要がある。
急激な技術変化が人間社会に及ぼす影響を振り返り、科学技術の思想的背景にも目を向けたい。

◆「最後に」

皆さんにとって佳い年になりますよう心から祈念いたします。
ご安全に！

取締役会長　　赤堀　肇紀